

乳幼児を持つ母親の養育感情に関する研究

— 育児ストレスと母子相互作用に焦点を当てて —

大河内 絵 里

【問題と目的】

「育児ストレス」、「育児不安」など子育てについて感じるつらさやしんどさに関する研究が盛んになされているが、これまでの研究では、母親自身が生活全般にわたって感じている不安や抑うつと、子育てに携わることで生じる感情とが区別なく測定されることが多かった。またこうした「育児ストレス」、「育児不安」が高いことが、子どもの発達に影響を及ぼすという研究がなされつつあるが、そのメカニズムは未だ明らかではない。本研究では、母親が子育てについて感じるつらさやしんどさが、母親を取り巻く環境からはどのような影響を受け、そして子どもとのやりとりにはどのような現れ方をするのかを研究することを目的とした。

【研究1】

目的 乳幼児の育児に携わる母親が感じるつらさやしんどさ、充実感といった両側面の感情を「養育感情」とし、母親の養育感情は、①母親自身の抑うつ感情、②子どもの気質、③配偶者との関係とどのような関係にあるのかを調査することを目的とした。

方法と対象 およそ1歳半から3歳までの子どもを持つ母親280名。質問紙調査の内容は、(1)フェイスシート、(2)母親の養育感情、(3)子どもの気質、(4)母親の抑うつ感情、(5)配偶者との関係の5部門からなり、計80項目である。母親の養育感情については、奈良間(1999)の日本語版 Parenting Stress Index より①「親役割によって生じる規制」、「親としての有能さの欠如」の2つの下位尺度と、柏木・若松(1994)の親の発達尺度の一部を使用。子どもの気質については菅原・島・戸田・佐藤・北村(1994)の日本語版 Toddler Temperament Scale (日本語版TTS)の中から、①見知らぬ人・場所への恐れ、②世話のしにくさ、③体内リズムの規則性、④反応強度の4つの下位尺度を使用。母親の抑うつについてはZungのSelf-rating Depression Scale (SDS)を使用。配偶者との関係については、「つらいときや困った時に相談するのは?」、「一緒に行動して楽しいのは?」といった6つの場面(大日向, 1988)を設定し、配偶者、子ども、自分の親といった13の選択肢の中からあてはまる人物を2人まで選択させた。その結果配偶者が選択された数の合計を、配偶者との情緒的關係とした。

結果 母親の養育感情は「親になってからの成長」、「親役割による規制」、「親としての自信喪失感」の3つの下位尺度からなることが示された。母親の抑うつ感情が高いと、母親の養育感情はいずれもネガティブな方向に高くなることが分かった。また、子どもが世話のしにくい気質の持ち主である場合には、親としての自信が低くなり、子どもの生理的なりズムが不規則である場合には、母親の抑うつ感情が高くなることがわかった。今回の調査では、夫婦関係と各養育感情との間に関連は見られなかったが、夫婦関係が希薄であるほど母親の抑うつ感情が高くなることが示された。

考察 母親の抑うつ感情が高いことは、子どもと関わることによって生じる養育感情と密接な関連を持っていることが示された。本研究では両者の間の因果関係については言及できないが、適切な介入を検討するためには、時系列的に相互に関連しあう関係を解明することが課題と考えられる。また夫婦関係が希薄であることは、母親の抑うつ感を高めることを介して、間接的に母親の養育感情に影響を及ぼす可能性も考えられた。子どもの気質的特徴によって、母親への影響の仕方も異なるため、母親が育児困難を訴えている場合などには、子どもの気質的特徴を専門家が把握することで、的確な介入がなされるのではないだろうか。

【研究2】

問題と目的 母親の育児ストレスが子どもの発達に及ぼす影響について検討がなされ始めている。例えば服部・原田(1991)は、育児ストレスの低い母親を持つ子どもは1歳半と3歳時健診での発達検査において、言語や社会性の発達が良好であることを見出している。しかし、育児ストレスが子どもの発達に、どのようなメカニズムで影響を及ぼすかについては、未だ明らかではない。そこで、研究2では研究1において測定した養育感情の、「親役割による規制」、「親としての自信喪失感」の各得点が高く、「親になってからの成長」得点が高いことを「育児ストレスの高い状態」と再定義し、育児ストレスの高い母親と低い母親とでは、子どもとのやりとりにどのような違いが見られるのかを検討することを目的とした。

対象と方法 研究1で実施した質問紙調査において、昼

食場面の観察調査にも協力可能な方を募集したところ、11母子組の協力が得られた。その中から育児ストレスの高い母子と低い母親母子の各1組、計2組を分析の対象とした。また、「ごはんを食べて欲しい」、「席に座って欲しい」といった母親の希望と、「もうお腹がいっぱい」、「早く遊びたい」といった子どもの希望がずれる場面を『食い違い場面』とし、この食い違い場面において育児ストレスの高い母親と低い母親とでは、母子のやりとりにもどのような違いが見られるか？ということに焦点を当てて分析を行った。

結果と考察 分析の結果からは、育児ストレスの高い母親も低い母親も、食事の始まり部分においては「食事を楽しくしよう」、「子どもの食べる気を起こさせよう」という志向性に基づいて、子どもの行動をMirroringしたり、明るいトーンでの話しかけるなど、ポジティブな働きかけが多く見られた。母子の『食い違い場面』が続くと、育児ストレスの低い母親も一旦は「いい子にしないとママがハムさん食べちゃうぞ」などの“脅し”といったネガティブな働きかけを用いるようになる。この場合、子どもは食事になかなか集中しなくなる。しかしその後、「デザートに切り替えて、子どもの気持ちを引きつける」といった具合に、母親自身の気持ちの切り替えがなされ、その後は「ごはんさんがスプーン飛行機で飛んでくよー」といった“擬人化”など、ポジティブな働きかけに戻り、子どもも食事に集中するようになる、といった様子が観察された。他方育児ストレスの高い母親は、母子の『食い違い場面』が続くと「ちゃんと食べないとおやつпойしちゃうぞ」といった“脅し”や「座りなさい!」といった“命令”などネガティブな働きかけが出現する。育児ストレスの低い母親と比較すると、気持ちの切り替えをすることが難しく、ネガティブ

な働きかけが続く様子が観察された。また子どもも一旦食事から気持ちが逸れると、なかなか集中できず、悪循環が続いてしまうと考えられた。

これらの結果から、育児ストレスの高い母親も、決して子どもへの働きかけの方略が少ないわけではなく、「育児ストレス」という気持ちのくもりにのために、自分自身の気持ちの切り替えをすることが難しいのではないかと考えられた。またその結果として、母子間の『食い違い』をなかなか修正できず、悪循環に陥ることも予測される。

【総合考察と今後の課題】

研究1では、母親—子どもに着目し、母親の育児に携わる上での気持ちが、環境要因からはどんな影響を受けるのか？といった点に注目して研究を行った。ここでの結果からは、母親が感じる育児についてのつらさやしんどさは、母親自身の要因からも、環境の要因からも影響を受けていることがわかり、これらの点に着目した介入も有効なのではないかと考えられた。また研究2では、こうした母親のつらさやしんどさが、実際の母子のやりとりにはどのような形となって現れるのかについて検討した。その結果、親としての自分に自信がなかったり、親役割をとることに規制感を強く感じている母親は、子どもと母親自身の気持ちがずれる場面において、母親自身の気持ちを切り替えることが難しく、子どもへのネガティブな働きかけが続くことが示された。

今後は母親—子どもだけでなく、その母子の属する文化的な要因や時代背景を考慮に入れた研究が必要であると考えられる。また、観察調査に関しては、母親の取る行動が母親にとってどのように意味づけられているのか？といった視点も必要であろう。